

阿部牧郎

白い肌の神々



しろ はだ かみがみ
白い肌の神々

© Makio Abe 1987

131-13

1987年12月15日 初刷

著者 阿部牧郎

発行者 荒井修

東京都港区新橋四一〇二一〇五
発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替東京四一四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社
製本

編集担当 山下寿文

ISBN4-19-568410-2 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

白い肌の神々

阿部牧郎



目次

ビールと牛肉 5

人妻たち 71

昼と夜のあいだ 148 *

牧場にて 213

晴れたり曇ったり 257

新しい波 291

解説 宗肖之介 345

ビールと牛肉

晴れた秋の日の昼休み、東京銀座の北海ビール株式会社のビル内に、あかるい女の声でアナウンスがながれた。開発部開発課の吉田テル子の声だった。

「ただいまから社員ホールで牛肉の社内販売をおこないます。開発課の生産した松阪牛まつさかよりおいしいビアビーフを、市価の四割引でお買い上げいただけます。みなさま、おさそいあわせのうえおいでください」

テル子がやっているな、となんとなく笑って、林田啓一は目の前の陳列ケースにならんだ牛肉の山をみわたした。

北海ビールの工場でできたおびただしいビール粕かすでつくった飼料をたべ、ビールを飲んで育った牛の肉である。年間十二万トンも出るビール粕の広範囲な利用のため、開発課がみずから仔牛こしを買って農家にあずけ、カスで成牛に育て、その肉を市販しようとのプロジェクトが現在

進行中だった。市販にさきがけて、まず社員にその味を認識してもらう目的で社内販売をおこなうのだ。

林田啓一は入社四年目。最近、営業部から開発部開発課へ移ってきたばかりである。得意先まわりや販路の開拓に従事し、やっと多少実績のついたところで開発部などという妙な部門に移され、正直いって落胆した。

開発部は名のとおり、新製品の開発が業務である。その業務にはなにより創意とバイタリテイに富む人材が必要とされている。適任と思ってきみを推した。売上げの九十パーセントをビールに依存し、新製品の開発によって経営多角化をはからねばならぬ当社にあっては、開発部こそ今後はいちばん陽のあたる部門となるはずである。

異動にあたり、前の課長はそんなお上手をいつていた。だが、内実は、会議などで遠慮なく物をいう林田を苦々しく思って追いだしたのだとわかっている。酒をよく飲み、麻雀と競馬を欠かさず、女の子からしばしば電話の入る林田の生活態度にも、堅物の課長は顔をしかめていたようだった。

だから開発課へ移されたのだ。陽のあたらぬ部門で苦勞するほうが本人のためだ、などよいけない思案もしたのである。こちらへ移って業務をよく知り、新製品ビアビーフの開発に興味と情熱を感じはじめているが、ビール会社の社員がなぜ肉を売らねばならないのかという不満がまだ心にのこっている。

いまのアナウンスをきいて、三々五々社員がホールへ入ってきた。三十すぎのニューファミ

リー世代と中高年の役付きの社員がほとんどで、女子社員の姿はすくない。独身の男の社員は牛肉が安かろうと関心はないし、女の子たちは世帯じみたところを会社でみせたくないのだから。

「ほんとにうまいのかね。わが社のビアビーフなるものは」

「外見は上等だな。ビール粕を喰った牛だからうまいよな、きつと」

半信半疑の社員たちの前で、林田は用意のガスレンジに点火し、バーベキューをつくりにかかる。試食してもらうためだ。

吉田テル子が放送室から帰ってきて、林田を手つだって肉を焼き、

「さ、どうぞ。おいしいんですよ。開発課が自信をもっておすすめします」と、皿に盛ってすすめてまわる。

テル子は頭の回転のはやい、活発な女子社員である。ひきしまった小型の顔と、少年のようなしなやかな体をしている。仕事のあいま、そばを通るテル子のすんなりした脚に目をとめたとき、林田は開発課へ移ってきたことがふと幸福に感じられたりする。

いい匂いが社員ホールにただよった。社員たちは焼肉を一切れずつ口にふくみ、例外なく満足そうに目じりをきげた。

うまいじゃないか、やわらかい、甘味があるなどとの感想が耳に入る。松阪肉よりうまいぞ、とテル子の肩をたたく部長もいた。便乗して林田もたべてみる。何度たべてもたしかにうまい。すきやき用の上ロースなど、身量^{みびき}ではなく、街の小売店で売っている百グラム九百円から千

円クラスのものに負けないと思う。北海ビールの開発課は、産地直送の利を生かして、それを百グラム四百五十円から五百円で一般家庭に売る計画なのだ。

ビアビーフは最近牛が育って、ぼつぼつ入荷しはじめたところである。だが、まだ販売ルートも確立していないし、供給できる肉の量もほんの僅かだ。世界一高い肉をたべている日本人々へ安い肉を供給する、などと大きなことのいえる段階ではないが、みんなに味のよさ、価格の安さを賞められると、新米の林田もやはりわるい気持ではなかった。

すきやき、バタ焼き用を中心に、ビアビーフはどんどん売れはじめた。家族との団欒を思い描いて、社員たちは模範パパの表情でつぎつぎに注文をくれ、金を払った。テル子と林田は顔に汗をにじませて包装をつづける。不馴れなので、うまくいかない。ついに捌ききれなくなつて、所属部課と氏名を紙に書いてもらい、金をもらって、品物はあとで本人の席までとどけることにした。

「すごい人気だなあ。これは有望商品だ。瓶入り生ビールより人気がある」

「それはそうですよ。牛肉はなにしろ十五兆円産業ですからね。男性がいくらビールを飲んでも追いつかないわ」

全メーカーの売上げをあわせて、ビールの市場は年間一兆円。これにたいして牛肉市場は四兆円、外食産業は十一兆円。牛肉にはビールの十五倍の市場があるとは、開発課長の間瀬の口ぐせである。

開発課は間瀬以下総勢五名の小世帯で、テル子だけが女性である。そして、林田をのぞく三

名の男性社員は、みんな課長代理とか主任とかの肩書付きの、三十歳以上の者ばかりだった。彼らは販路の開拓や、ビアビーフセンター設置の準備で多忙である。社内販売などの雑用は、若い林田とテル子がどうしてもひきうけなければならなかった。

昼休みがやがて終わろうというころ、三人の女子社員がつれ立って買物にやってきた。

林田啓一は照れくさくて頭をかいた。三人とも、彼がもといた営業部の女の子だ。課はちがったが、なかの一人島谷ゆかりに、林田は以前から、ひそかに熱い気持をよせていた。

「まあ、林田さん、お肉屋さんなの」

一人の女子社員がおどろいて、すっ頓狂^{どんきやう}な声をあげた。

北海ビールは従業員数八千名の大企業である。開発課が牛肉の生産、販売に取組んでいることをろくに知らない者も多い。

「そうさ。ビールを飲みすぎたから、こんどは食物をあつかうわけさ。一つどう。おいしいぞ。わが社のビアビーフ」

焼肉の皿をさしだすと、おとなしい島谷ゆかりがまっさきに一切れ食べてくれた。

「おいしい——」

ゆかりが微笑^{ほほえ}んで林田をみつめる。

髪の毛ながい、目の大きな、吉田テル子とは対照的におちついた、抒情的^{じよじよう}な雰囲気^{ふんいき}の娘である。色が白く、ふっくらとやさしそうな体つきをしている。みつめられて林田は心臓がおどった。所属がわかれて、かえってゆかりと心やすくなったような気がする。

おなじ職場にいるあいだ、林田はゆかりを意識しながら、めったに話をしたこともなかった。ゆかりが口数のすくない娘であるだけ、とくに用事もないのに近づいていきにくかったからだ。いつでもチャンスがあると考えて、彼女に声をかけるのを一日のばしにした傾向もある。こうして職場がはなれて会うと、そんなわだかまりが消えて、逆に話がしやすくなった。久しぶりで顔をあわせたかつての同僚どうしが近況を語りあうのは当然だという安心感のうえに立って、たがいに接近できるからなのだろう。

「営業部はどう。相変らずいそがしいんだろうな。島谷さんのところの課長は、例によって会社を一人で背負って立つ顔なのかい」

「そうなんです。よくお説教されるわ。年とってから悔い^くがのこらないよう、せいっぱい生きるべきだって」

「その趣旨はわかるけど、せいっぱい生きるってことは、仕事さえしていればいいってことじゃないと思うんだよな。たのしむほうも、せいっぱいやりたいよ」

「私も同感。こんど課長にお会いになったら、そういつてくださいな」

たったそれだけの会話だが、林田啓一にとっては大収穫だった。

これで突破口ができた。あとは男の才覚と腕で茨^{いばら}の道を切りひらくだけだ。

ゆかりたち三人の女子社員は、それぞれヒレ肉を注文した。ほかの二人は家へのお土産^{みやげ}用に四人前、五人前をオーダーしたが、ゆかりは一人前だけだった。アパートで一人暮らしなのだろう。彼女らの注文をメモしながら、林田は心のなかで、島谷ゆかりをデートにさそうチャンス

をすでにつかみとっていた。

昼休みが終り、ホールから人影がなくなった。林田と吉田テル子は一時間近くかかってすべての注文の包装を終え、手わけして社内へ配達してまわることになった。

「営業部は美人が多いのね。林田さん、営業部のほう、おねがいするわ」

林田の下心をみすかして、テル子がすこし口惜しそうな顔でいった。

「開発部にも美女は多いさ。とくにうちの課の美女にはあこがれているよ」

ぬけぬけと林田啓一はいつて、荷物をかかえて立ちあがった。いまの一語で、テル子は機嫌をなおした様子である。

営業部の男女社員に注文の肉を配達してまわったあと、林田は島谷ゆかりの席へいつて、彼女をオフィスの外へ呼びだした。たえまなく電話が鳴り、商談の声やタイプライターの音が渦を巻いて、営業部は相変らず湧き立つように多忙だった。

課のまんなかの席で、ゆかりは顔を火照らせて事務作業に熱中していたが、林田に呼ばれて、不審そうな面持で席から立った。が、人のいない廊下へ出ると、恥ずかしそうに笑って、かるく身をくねらせる。オフィスのあわただしさの外へ出て、一人の若い女の素顔がよみがえり、林田啓一の顔を、匂い立つような新鮮な色香が包みこんだ。

ゆかりの注文した肉を、わざと林田はもってこなかった。

「べつに品切れじゃないんだ。ステーキを食べるなら、おれと一緒にどうかと思って。つきあってくれないか」

「うわあ。ごちそうしてくださるの」

ゆかりは歓声をあげ、両手で胸を抱きかかえるような仕草をみせた。

夕刻六時。三丁目の喫茶店で。すばやく約束して二人はわかれる。エレベーターの前でふりかえると、ゆかりは目を伏せ、すこし気取ったあるきかたでオフィスへもどった。林田の視線を意識しているのだろう。美しくみえるよう身構えている。うす暗いビルのなかで、一人だけ陽光をあびたように彼女の姿はかがやいていた。ユニフォームとブルーのスカートを透して、ふっくらと小太りの、起伏のゆたかなゆかりの裸身がはやくも林田の脳裡にうかびあがった。

デートの約束ができると、仕事はかどる。社内販売のあとしまつを終え、課にもどってデスクワークにはげんだ。

農家に飼育を委託した牛をひきとり、解体して肉を商品化したあと、内臓とか、頭とかをどう処理するかきめるのが、いま林田にあたえられた課題である。いろんな資料をしらべて食肉市場の様子を知り、それから行動をおこさねばならない。

デスクワークは、つまりいまは学習だった。林田は、正面の席の吉田テル子の横顔やしなやかな体の動きも念頭になく、夕刻まで資料しらべに没頭した。オフィスへ帰ってきた課長以下の先輩たちから麻雀をさそわれたが、

「すみません。きょうは田舎から出てきた友達と一緒にメシを喰う約束なので」

と、ことわって、五時半に会社を出て約束の喫茶店へ入っていった。

島谷ゆかりはまだきていなかった。林田啓一はすみの席に腰をおろし、腕を組み、じっと目

をとじて、デートの約束のあとオフィスへ帰っていった彼女の姿を思いうかべる。中ぐらいの背丈の、起伏のゆたかなゆかりの裸身が、まるですでにみたことのある女の体のように、あらためて林田の瞼の裏側にうかびあがった。

そうになると、想像が勝手に進行しはじめた。林田はホテルのベッドにゆかりをおし倒し、のしかかって、まんまるな彼女の胸のふくらみに頬ずりし、口にふくんだ。ゆかりは顔をしかめ、甘くあえいで、やがて両手で林田の頭をかかえて抱きよせる。

林田は彼女の腋や腰にくちびるを這わせ、やがて下方へずりさがって、彼女の下腹部の草むらから、その底へキスを下降させる。濡れた桃色の花がおずおずひらいて、林田の愛撫を待ちうけていた。そこへキスすると、嵐が二人のうえにおしよせてくる。

「どうしたの林田さん。疲れているの」

声がきこえ、おどろいて目をあけると、すぐ前に島谷ゆかりの顔があった。

ゆかりがテーブルの向う側に腰かけたのを知らず、妄想にふけていたらしい。

自分の頭のなかを覗かれたようで、林田はあわてて姿勢をただした。いまの妄想で勃起している。あわてて脚を組み、それをおさえようとしたが、イメージが去った代り、ほんもののゆかりの体がすぐ前にあるので、それはおさまりそうもなかった。

「すこし疲れたよ。職場が変わったので、やはり気疲れするんだろうな」

「たいへんねえ。食事して、はやく帰って眠ったほうがいいわ」

「心配ないよ。もう疲れはとれた。きみの顔をみたら猛烈に元気が出てきたぜ」

笑いかけると、ゆかりはあわてたようにまばたいて微笑みかえしていた。

林田は目をみはる思いだった。ゆかりは上気し、目が濡れて、あきらかに性的な刺戟^{しげき}を受け、顔をしている。いまの林田の妄想が伝染したような表情である。男が欲望にかられると、さほどいやな相手でないかぎり女も感応するのだろうか。だとすると、性的な妄想はそのまま男のセックス・アピールになるということになる。ありがたい話だと林田はひそかに笑いたくなかった。

しばらく雑談したあと、やっと勃起がなおったので、林田はゆかりをうながして立ち、近くのステーキ店へ入っていった。わざとはじめての店をえらんだ。

ステーキと水割りウイスキーを注文してから、支配人のところへ行って名刺を出し、こんど牛肉を販売することになった、その節はよろしくと挨拶^{あいさつ}する。よく働くところをゆかりにみせたい下心があった。

「へえ、ビール会社さんが肉をおやりになるんですか。どうしてまた——」

「ビールを飲ませて牛を育てるんです。いい肉ですよ。一度たべてみてください」

「なるほどねえ。松阪肉とおなじですな。しかし、うちは仕入先がむかしからきまっているので、ご期待にそえるかどうか」

どこの店でもこんな返事である。

どの小売店もレストランもすでに既存^{もく}の食肉専門業者やハムメーカーなどの系列下にある。食肉の販売ルートに新入りが喰いこむのは、予想よりはるかに困難だった。

從來にない産直方式をとろうという課長たちの考えはただしいのだと林田は納得して、ゆかりの待つテーブルへ帰っていった。

「たいへんなのね、開発課は」

「どこもたいへんさ。たまにこうしてデートでもしないと、神経がもたないよ」

二人は水割りで乾盃した。

ステーキを突つつき、水割りをお代りする。ゆかりはあまり飲めるほうでないらしく、すぐに顔をうす紅くする。上気して目が濡れていたさっきの表情がよみがえった。

「さっき、きみが喫茶店にきたとき、おれがなにを考えていたかわかるかい」

思いきって林田は訊いた。

女にたいしてあまり度胸のあるほうではないはずだが、ふしぎにきょうは積極的に行動できる。なにか手応えがちがうのだ。

「わからないわ。でも、目をつぶっている林田さんをみて、私なんだか変だったわ。ジーンと胸がしびれるみたいで」

「疲れているようで、かわいそうだと思ったのかな」

「それもあるわ。でも、それだけじゃないの。なんとなくジーンときた。林田さんに吸いよせられるみたいだった」

目をつぶって、なにを考えていたの、とゆかりは林田をのぞきこんだ。期待と不安のいりまじった表情である。